

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 吉田幸恵

【所属】 (助成決定時) 立命館大学大学院先端総合学術研究科

【研究題目】 朝鮮ハンセン病政策史再考——ハンセン病者の「生」の紡ぎ方から、ハンセン病政策の歴史を再検討する

【研究の目的】 (400字程度)

日本におけるハンセン病問題は、国家によって強制的に隔離されたという特異性を持ち、そしてハンセン病患者の多様な経験そのものが、ハンセン病の歴史を形成しているため、様々な学問分野、研究者たちの関心をひきつけている。しかし、かつて日本統治下に置かれていた朝鮮のハンセン病政策史については管見の限り十分に検討されていない実状がある。

「ハンセン病」をテーマに扱った研究は、多種多様な言説や行為、ハンセン病者の病の経験を語りとして捉え、そのライフヒストリーの構成から病者の主体的な生のあり方に眼を向けることが必要であるとしているライフヒストリー研究が中心となっている。

海外の政策と日本の政策を比較検討した研究は存在するものの、特に植民地諸国におけるハンセン病隔離政策については日本においては検討されていないと言ってよい。この現状を受け、本研究は朝鮮ハンセン病隔離政策史を、そこで生きるひとびとに着眼し、分析・検討し、さらに現状と課題について考察することを目的としている。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

文献及びフィールドワークによる聞き取り調査から植民地時代に創設された収容施設・小鹿島病院および日本の施策とまったく異なり、日本においては成功した事業であると評価されている「定着村事業」の検証をおこない、基礎的そして新たな知見提供をおこなった。

朝鮮が日本からの脱却を目指しておこなった政策のなかで助成者が注目すべき点はこの「定着村事業」である。定着村事業とは1961年に政府が土地、家屋、職業(養豚、養鶏)をハンセン病者に与え、国立の小鹿島病院から離れ自立生活を目指して展開された事業である。当時は全国に100箇所以上あったといわれているが、現在は約30箇所ほど存在し、申請者はその中でも最大規模を誇る益山(イクサン)定着村をフィールドとし、すでに数年前から聞き取り調査を開始している。引き続きイクサン定着村および国立小鹿島病院を中心としたフィールドワークをおこなった。

また、私設の療養所が設置されていた大邱(テグ)市、麗水(ヨス)市などを訪問し、当時の行政資料を渉猟、分析し、朝鮮におけるハンセン病政策の史的研究もおこなった。

【結論・考察】 (400字程度)

ハンセン病問題は当事者の高齢化等により、ある種の「終着」に向かおうとしている。しかしながら、このような状況において不十分な朝鮮ハンセン病政策史を再検討することで新たな問題点が検出される可能性もある。それこそが我々が今後も取り組まなければならない課題であることが明らかになった。

今回の調査では、いまだなお続く差別のなかで、「内(ハンセン病コミュニティ)の人」と「外(社会)の人」の軋轢だけではなく、同じコミュニティで生活している人たち同士の中でも軋轢が生じていることがわかった。それは国賠訴訟の際に起きたもので、「もう終わったことなんだから静かにしてほしい」という当事者と「いや、まだ闘わなくてはならない」と言う当事者たちの軋轢だった。これは日本においても見られた現象であり、アジア圏だけではなく、優生学発祥の地である英国や欧米ではどのような現状にあるのか、それらの現状が国際水準的にみて、どのような位置にあるのか、という事を考えなければならない。